
鬼花伝

音踏よしの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼花伝

【Nコード】

N1538Z

【作者名】

音踏よしの

【あらすじ】

ヤシロ チトセ 八代千登瀬は15歳の誕生日の日、両親を事故で失う。彼女の遠縁だという真山時雨 マヤマ シグレ の家に養子として引き取られた。事故のショックから立ち直れない彼女を、時雨は不器用ながら励まし、ふたりの距離は縮まっていった。

家族同様に暮らし始めた頃、家にひとりの少年が訪ねてくる。彼の名前はタスク。

彼と一度も会った事のない千登瀬だが、何故か「懐かしい」と感

じてしまう。

そして、今まで平和だった千登瀬の身の回りで、怪しい影が蠢き始める。

花卉の章

——助けて……私たちを助けて……。

また声がする。これで何度めだろう。

いつからか、自分の耳に聞こえるようになった幻聴に顔をしかめる。

今にも息絶えそうな、か細い女性の声。けれども、必死さだけは伝わってきて、何もしてやれない自分が酷く無力に思えてきた。

「千登瀬、どこか具合でも悪い？」

「んー悪くはないけれど……ちょっとね」

「どうした？無理しなくてもいいんだぞ」

心配症な両親に、幻聴が聞こえると知られたら、いらない心配をかけてしまうかもしれない。それに、空耳という事もある。

車に揺られてもう時間は経つ。そろそろ、母親の実家がある田舎に着くだろう。

「ううん。おばあちゃんの家で少し休めばいいよ」

「ならいいけれど……」

まだ不安がる両親に、大丈夫だと笑ってみせる。座席により深く腰かけて、ウトウトとしだすと、先ほどの幻聴がより鮮明に聞こえてきた。

——お願い……私たちを……どうか、助けて……。
——ねえ……お願い……ねえっ！

一際大きく聞こえた声と、その瞬間にグラツとした揺れと鈍い痛みが体を襲った。

耳元で大きく何かが割る音。横目で見ると、車のフロントガラスが割れていた。むせるような圧迫感で、一瞬だけ呼吸ができなくなる。

視界は傾いていて、自分自身が倒れているのだと気づいた。

「……あれ」

目の前にブランと映る腕。ガラスで切れたのか、その腕は傷だらけで、血が出ていた。

「おかあさん……？」

その手首にされてある薄桃色のブレスレットは、母親がつけていたものだった。

ハンドルに顔をうつ伏せてピクリとも動かないのは、父親だろうか。

「おとう……さ……」

カチカチと唇が震える。遠くで大丈夫かと呼びかける声が聞こえる。声を出して助けを呼ぼうとしても、恐怖で何も出なかった。

目の端から涙が溢れ、それを拭う手は痛みで動かせない。

事故だ、と。

少し遅れて気がついた。

「あ……ああ……あああ……」

意味の無い言葉の羅列の後、

[illegible]

彼女は慟哭し、泣き叫び、吐き出し、そしてそのまま意識が途切れて。

次に彼女が目を覚めたのは、1週間後の病室だった。

人物紹介（前書き）

簡単な人物紹介を。
増えると思います。

人物紹介

□ ヤシロ チトセ
八代千登瀬

15歳 女

まっすぐに長い黒髪に、白い肌を持つ。

中性的で整った顔立ち。

両親を事故で亡くしており、そのショックから立ち直れていない。
争い事を好まない優しい性格。

□ マシマ シグレ
真島時雨

20代半ば 男

明るめの茶髪に、両耳にピアスをしている。

外見とは裏腹に、茶華道界に名が精通している。

基本浴衣。不器用だが根は優しい。

□ タスク

18歳 男

男子にしては長めの黒髪に、切れ長の目を持つ。

あまり騒がず常に冷静だが、かなりの毒舌家。表情は一定。

冷たく見られがちだが、実際心の中では色々と感情を表している。

□ シラスイ
ワコ
白縫和子

20代後半 女

グラマラスな女性で、時雨の古い友人。

千登瀬の姉的存在。妖艶な雰囲気とは別に、かなり大雑把な性格。

「来るもの拒まず」をモットーとしている。

01・1 翡翠の幻聴

交通手段もさほど無い、田んぼばかりが広がる田舎町 「楠樹町」 クスキチヨウ

都心からかなり離れており、そこまで行くのにはバスで数時間ほどかかる。人口も少ないが、山に囲まれているそこは、季節の変わり目の景色が良く、観光スポットとしても人気だった。

楠樹町から離れた山の中のバス停に、一人の男がいた。

180は越えているであろう長身で、明るめの茶髪。耳には派手なピアスをしており、とても田舎の人間とは思えない。

しかし、その外見に似合わず、藍色の綺麗な浴衣を身に付けていた。

煙草を吸いながら、男はベンチに座り、携帯の液晶画面を睨みつける。

「……あっちな」

そして五月蠅い。

山に囲まれているこの町では、ひっきりなしにセミが鳴いている。うっすらと額に汗を滲ませながらも、その男——真山時雨はある人物を待っていた。

「お、アレじゃねえのか」

そしてその視界にオンボロのバスが映る。

数時間に一本しか無いバスには、ひとりの少女が乗客として乗っているだけだった。バスの運転手は時雨を見つけると、軽く微笑んだ。

バス停にバスが止まり、ドアが空気の抜けるような音をたてて開く。

運転手に料金を手渡し、リズムよく段差を降り、少女の姿がハッキリと時雨の目に映った。

透き通るような白い肌に、腰までまっすぐ伸びた黒髪。

顔立ちは中性的で整っており、可愛いというよりは綺麗といった印象を受ける。

白の半袖のセーラーを着ており、今時の子にしては珍しく、スカートも膝上だった。

「久しぶりだな、千登瀬」

名前を呼ばれて、千登瀬はそっと目を伏せた。恥ずかしいのか、緊張しているのか分からないが、その頬は少しだけ赤く染まっている。

「時雨さん、緊張してるんですよ。優しくしてあげてくださいよ」

「わーってる。アンタもご苦労だった。わざわざ悪いな」

「いいえ。私はこれで仕事が終わりなんで。なんなら、町まで乗せて行きましょうか」

「いや、いい。ちよつとコイツと歩きながら行く」

運転手は笑顔を崩さずに頷き、ドアを閉めた。

バスが遠ざかっているのを見送り、「さて、と」時雨は立ち尽く

している千登瀬を見下ろした。

「ほんじゃ、行くか」

「えっと……お、お世話になります……」

遠縁の親戚が事故に合い、その子どもがひとりだけ助かったと連絡を受けたのは、1ヶ月ほど前だった。

夏休みの初めに母親の実家に帰ろうとしていた時、大型トラックが誤って突っ込んだのだという。

車は大破し、助手席と運転席に乗っていた夫婦は即死だったらしい。後席に乗っていた千登瀬だけが軽傷で済んだのだ。

千登瀬の両親とはそれなりに親睦のあった時雨が急いで病院へ向かい、対面した千登瀬は見るに耐えない状態だった。

事故のショックからろくに食事も取れず、両親のことを思い出しでは静かに涙を流す。

その繰り返しであった千登瀬を、時雨は迷うことなく引き取る事に決めた。年頃の娘が男とふたりきりで住むという事に、周りの親戚からは批判をされたが、逆に千登瀬の面倒を見てくれそうな親戚もいない。

祖父母に頼もうとしたのだが、父親の方は既に他界しており、母親の方は病気を患っていたため、千登瀬をあずける事ができなかったのだ。

「てなわけで。お前は退院したら、俺の家に来い。田舎だから何も

無えけどな」

そう病室で言ったのが、ちょうど1ヶ月ほど前。
精神的なショックが大きいため、学校もしばらく休む事にした。
田舎での暮らしが、少しでも千登瀬にとって心のケアになるのなら
と、時雨は考えていた。

「ここが今日からお前の家。わかったか？」

バス停から歩いて数分。時雨のとおり、田んぼと少しの家しかないそこは、山に囲まれており、とても美しい風景だった。

時雨に案内されたのは、和装の一軒家で、かなり大きい。今まで
ひとりで住んでいたということが信じられないほどの広さだった。
庭も丁寧に手入れが行き届いており、時雨の趣味なのか、盆栽が
並べてある。

松の木はとても立派で、そこが木陰となっていた。庭には小さな
池もあり、鯉が数匹泳いでいる。

「……綺麗」

「知り合いから貰った。飼うのは大変だけど、愛着湧いちゃってな」

「私もお世話してもいい？」

「おう。後でフの場所教えてやつから」

玄関から入ると、木の匂いがする。

ヒタヒタと冷たい床を歩いて、時雨は襖を開けた。

そこには、8畳ほどの部屋があった。花柄の布団と、勉強机、本

棚が置いてある。

「お前の部屋な。押入れもあるから。昨日届いた荷物が、そのダンボールな」

「ありがとうございます」

自分のためにここまでさせてしまっているのだろうか。

千登瀬は内心不安に思いながら、深々とお辞儀する。
すると、くいと大きな手で頭を上に向かせられた。

「仰々しくすんな。お前は今日からここに住むんだっつうの。俺にも敬語使うな。あと、ここに住むからにはメシとか作ってもらわいな。今日は俺が作るけど」

「え、えと……は、はい」

「だから、敬語やめろって。俺はお前の家族だ。お前は自分のとーちゃんかーちゃんに敬語使うか？」

そこまで言って、ハッと我に帰る。

千登瀬にとって、両親のことはタブーだ。迂闊だったと自分の発言を悔いていると、

「ふふ……。使わないね」

微かに笑って、千登瀬が答えた。

久しぶりに見た千登瀬の笑顔。

時雨もニヤリと笑い、くしゃくしゃとその頭を撫でる。

「それでいいんだよ、バーカ」

少々子どもっぽいだろうか。

けれど、今の千登瀬にとってはこの方がいいのかも知れない。

ボサボサになった頭で、千登瀬がまた笑う。今度は、きっと時雨に笑いかけたのだ。

そう思うと、心の中が暖かくなった。

時雨の作った夕飯を食べた後、沸かしてもらった風呂に入り、もう休めと言われたので、早い内に布団に入った。時雨が買ったのだという、少し大きめの寝巻きは裾を負っている。

冷たい布団が千登瀬の体温でほんのりと温かくなってくる。

窓を開けているため、夏の夜の涼しい風が部屋に入ってくる。布団を肩までかけても、全然熱くない。

睡魔に勝てず、千登瀬が今にも寝てしまうという時。

——貴方は私を助けるべきなの。

「っ！」

また、あの声がした。

事故が合ってから、今まで聞こえていなかった幻聴。

悲しげな、憎々しげな女性の声。とても胸が痛み、耐え切れない気持ちになる。

——どうして？ どうして助けてはくれないの。

——貴方は……………を裏切るの……………？

「やだ…………っ、うるさい、うるさい…………っ」

耳を塞いでも、その声は脳内まで響く。容赦なく千登瀬を追い詰める。

いつから聞こえるようになったのかはもう覚えていない。気づけば、ふと聞こえるようになっていて。そしてどンドン、その声が鮮明になっていくのが恐ろしい。

――裏切るなって言っていたじゃないっ！

「うるさいッ!!」

上半身を起こし、乱れた呼吸を整える。不安げに辺りを見渡しても、誰もいない。

遠くで足音がして、こちらに誰かが向かってくる気配がした。息を潜めていると、後ろの襖が開かれる。

「千登瀬……？　どうしたんだよ。顔色悪いぞ」

「あ……時雨さ……」

電気を点け、不安そうに時雨が千登瀬の顔を覗き込む。明らかに動揺している千登瀬に、時雨が近くに腰を下ろした。微かに震えている千登瀬に触れようとした手は、ゆっくりと自分の膝の上に置かれる。

「……事故の事でも思い出したか」

「ち、違う……。そうじゃなくて」

「じゃあなに」

声の事を言ってしまうのか。

けれど、嘘をついていると思われるかも知れない。幻聴などと言

つたら、余計な心配をさせてしまう事もある。
そのまま言い淀んでいると、頭を優しく撫でられた。

「言ってみ」

大きな温かい手。

その低い声が不安を払っていく。

「……声、が」

「声？」

「声……が聞こえるの……。なんだか分からないけれど。ずっと前から……女の人の、とてもとても怖い声……」
「どんな？」

時雨の表情が怪訝そうになる。

「どうして助けてくれないんだって……。裏切るのかって……。とても辛そうな声で私に言ってくる」

「声……」

その瞬間、時雨は酷く切なそうな表情をして、無言でそっと千登瀬を抱きしめた。

しっかりと、離さないように。腕の中で何の反応もせず、抱きしめられた事に対して驚きを隠せずにいた千登瀬は、ただじっとしていた。

しばらく時間が経って。

ゆっくりと千登瀬を開放し、汗をタラタラと流した時雨は、やっってしまったという顔であさっての方向を見て、

「今のはセーフだろ……。いや、アウトか」

「セーフ……？」

「いや、なんでもねえ。もう寝ろ。声とやらは聞こえるか？」

「ううん。もう聞こえない」

「そりゃよかった」

再び布団に潜り、枕に頭を乗せて、

「おやすみ千登瀬」

「……おやすみなさい、時雨さん」

電気を消して部屋から出る。

長い廊下を歩きながら、時雨はチツと舌打ちをした。

（……ずいぶんと早いな。この調子じゃあ、もってあと数年だ）

（いつあいつらが来るか分からねえのに……。クソ）

（まだ千登瀬の居場所は知られてねえけど……もしかすると……）

遠くでひぐらしの鳴き声が聞こえる。あまりにも鬱陶しいその鳴き声に、時雨は青筋をたてながら、開いている窓から闇を睨みつける。

2度目の舌打ちをして、独り言のようにそっと呟いた。

「和子、聞こえてんだろ。ヤマが近い。さっさと帰ってきやがれ、このクソツタレ」

単なる独り言となって生まれたその言葉は、誰にも届かず、そしてそれに対しての返事も当然のように無かった。

しかし、外で吹く風が、時雨の言葉に答えるかのように一際激しく吹く。

その風に髪を揺らしながら、ニヤリと時雨は笑った。

「それでいい」

目覚まし時計が鳴って、その五月蠅さに瞼を重く開く。
時計を見るとちょうど8時だった。昨日、時雨に朝食を作れるようになれと言われた事を思い出す。

「……起きなきゃ」

遠縁の親戚で、父と親しかった、真山時雨という男。
小学生の時に、縁側で父と生花について談笑していたのが、時雨だった。

若いのに茶華道等に興味を持っている青年で、よく家に来ては、趣味の事で父とよく話をしていたのを覚えている。その時も綺麗な浴衣を着ており、派手な外見の割にはよく似合うと思った。

（時雨さんに迷惑かけないようにしないと……）

（水面所、こっちだったよね）

布団を畳み終えて、廊下に出てみる。千登瀬の部屋のすぐ左側が厠になっていると、昨日教えてくれた。そちらに行けば、水面所もある。

冷たい水で顔を洗い、鏡に映った自分の顔を見た。
髪を切れば、きっと少年のようにも見えるような顔立ち。よく性別を聞かれる中性的な自分の外見が少し嫌だったけれど、髪を伸ば

してからは女の子らしくなった。
少し伸びすぎたかもしれない。
そう思いながら自分の髪を弄っていると、

「千登瀬え。起きてるか？」

「あ、はいっ」

台所の方から時雨の声がして、慌ててそちらへ行く。

ふたりで協力して作ったのは、白菜と豆腐の白味噌汁、小松菜のおひたし、筑前煮だった。これに、炊きたてのご飯と冷蔵庫にあった納豆を付け足す。

お互い向かい側に座って、両手を合わせて、「いただきます」と言う。

時雨はまだ髪を整えていないのか、寝癖が酷い様だった。

「昨日はよく眠れたか？」

「はい。……ありがとうございます」

「敬語はナシだったろ」

時雨の言葉に、千登瀬は少し困った表情をした後、素知らぬ顔で味噌汁を飲んでいる時雨に、思い切って、

「ありがとう」

「……どうも」

時雨が嬉しそうだ。

それだけで千登瀬の心も柔らかくなる。温かくなる。

「ここ、クーラーしなくても涼しい……ね」

「風通しがいいように家が造られてるからな。ここらは全部そうだ」

今まで都会に住んでいた千登瀬にとっては、目新しいものばかりだ。風鈴の音も初めて聞いた。

「夏休みだから、そこのガキが五月蠅いだろうけど……。まあ静かなところだから」

「時雨さんは今日は休み？」

「日曜日だからな」

言われてカレンダーを見る。8月の第2日曜日。夏休みの真つただ中だ。

事故に合い、両親が亡くなって、戸籍を時雨の方に移した。苗字は両親のもののままだが、今は時雨の養子という形になっている。精神状態が不安定になっているため、中学校も休養しており、夏休み明けも登校するかは検討中だ。

「宿題とか……しなくてもいいのかな」

「お前がするべきなのは、そんな事じゃねえよ。まあ夏休み中にゆっくり休め。あ、羊羹食うか？おやつに食べるか」

（……おやつだって。……可愛い）

年上の男が発した子どものような言葉に、千登瀬が笑みを浮かべる。どうして千登瀬が笑っているのか分からない時雨は首を傾げて、そのまま筑前煮を口に運ぶ。

千登瀬がお茶を飲み干した直後、玄関のインターホンが鳴った。

「誰だよこんな時間に。今日は俺休みだぞ」

「時雨さんは座ってて。……私が対応してくるから、その間に髪の毛なんとかしてください」

「お前は敬語直せよな」

「……はい」

椅子から立ち上がり、2回目のインターホンが鳴ったので、急いで千登瀬が玄関へ向かう。

サンダルを履いて、玄関の戸を開ける。

「はーい」

「あ、どうも」

そこにいたのは、漆黒の髪を持つ綺麗な青年だった。

年齢は千登瀬より2、3歳ほど年上。大人しそうな落ち着いた雰囲気、格好いいというよりは、綺麗といった顔立ちに、千登瀬の心臓が少しだけ跳ねる。

「あの、時雨さんのお客さんですか……?」

「時雨?……時雨って誰だっけ」

「は……?」

来訪客の不思議な返答に、千登瀬も困惑する。不審者かと思ったが、そのような気配もない。

「アンタ……名前、なんだっけ」

「え、千登瀬です。八代千登瀬」

「やしろ……ちとせ……。へえ、いい名前もらってるじゃん」
「へ？」

今何か言ったのかと聞こうとしたが、後ろで物音がしたので振り返る。髪を綺麗に整えた時雨が立っていた。

時雨はじつと青年を見て、そして何かを閃いたように、

「ああ。和子が寄越したのか」

「……ども。タスクっていいいます。どうしたんですか、その頭。金髪ですね。いい年して」

タスクと名乗った青年の言葉に、時雨が青筋を立てる。つかつかと千登瀬の横を通り、タスクの服をガツと掴む。

「お前はなんだ？サラッサラの髪しやがって。いいんだよ俺は。ていうか金髪じゃねえし、茶色だし」

「歯に海苔ついてますよ」

「嘘ッ!!」

「はい。嘘です」

年下の子ども相手にムキになったり、その子どもに負けたりと、色々複雑な心境になったのか、時雨が深い溜息をついた。相当落ち込んでいるのか、体育座りをしている。

「えっと……時雨さんのお客さん……でしたっけ」

「お客さんではないけど……まあ、そんな感じ」

「中に入られますか？私たちは朝ごはんの途中だったんですけれど」
「入る。あと、あれ」

タスクはジト目で、端で座っている時雨を指さす。

「あれ、面倒くさい」
「……あはは」

タスクについて分かった事は、名前と、千登瀬より3歳年上の18歳、高校には行っていないという事だった。

質問攻めにあったタスクは深い溜息をつき、逆に今でも食いつくように質問している時雨は、なかなか答えようとしないタスクに苛立っている様だった。

「和子はいつ来るんだよ。何でテメエみたいなガキを連れて来させた。テメエは普段どこに住んでいる。さっさと吐け」

「えーと……何言ってたのか忘れた。もっかい最初から言って」

「糞ガキ……ッ」

「落ち着いて、時雨さん」

タスクに襲いかかるような勢いの時雨を慰める千登瀬。

「千登瀬」

「は、はいっ」

タスクに急に名前を呼ばれて、千登瀬が顔を上げる。

「女子がいつまでも男の前で寝巻きっていうのは……ちょっとアレなんじゃねえの……?」

「え?……うわっ! し、失礼しました!」

顔を真っ赤にさせて自室に戻っていく千登瀬を見送り、タスクがズズとお茶を飲む。タスクを睨みながら、時雨が舌打ちした。

「千登瀬には何も言うなよ……。マジで……」

「まだ覚醒してないんでしょ。わかってる。でもかなり大事にしてるみてえじゃん」

「そりゃあ……」

「あの子が、最後の切り札だからだろ」

タスクの言葉に、時雨の視線が鋭くなる。どこか狂気をも帯びたようなその視線に、時雨が苦笑した。

「あんまり殺気立つな。……アイツらが感づく。千登瀬の覚醒も早まるかもな」

「テメエ……本当に和子の連れだろうな」

「本当だよ。和子ももうすぐ来る。それまでは俺が彼女を護る。……アンタもだろう、真山時雨。なに飢えた目エしてんだよ」

やすい挑発に乗る事はない。相手は子どもだ。

だけど、そんな子どもに凶星をさされている自分が、どうしようもなく悔しい。

「千登瀬はここに置く。アイツが切り札だが何だが関係ねえよ。俺が……アイツに世話になったから……」

「何があつたのかは知らないし、興味もないな」

「教える気もねえよ」

灰皿を自分の方へ寄せ、浴衣の胸元からライターを取り出す。

「千登瀬が嫌がるんじゃねえの、煙」

「アイツは……辰巳が吸ってたから……」

辰巳とは、千登瀬の父親の名前だ。書道家でもある彼とは趣味が合い、よく家に招いてもらっては、お互いの趣味や仕事の話を話していた。華道の道を行く事を薦めてくれたのも、彼だった。

「帰って父親の事思い出させるんじゃないの」

「……その方がいい」

「は？」

「辰巳の事を忘れないでほしい……」

恩師が人の記憶から消えてしまう事は、とても心が痛む。タスクはそれ以上何も言わず、煙たい匂いを嫌がるかのように、時雨と距離を置いた。

そのまましばらくは沈黙の時間が続いたが、ふいに時雨が何かに気づいた。

「なに。どうしたの」

「……いや、なんでもねえ」

@

料理の量が、一人分多めになった。

真山家の夕飯は遅めのようで、夕食が整って全員が席に座ったのは、もう外が暗くなった頃だった。

「だからなんでテメエが居座ってんだよ！ 帰れ！」

「和子の所からここまで何日かかったと思ってんの。帰るわけないだろ。あ、千登瀬。ご飯のおかわり」

「千登瀬をこき使うなっつってんだよ！ テメエの寝る場所なんかねえからな」

「千登瀬と一緒に寝る」

「そんな事俺が許すと思ってるのか！」

「じゃあ……アンタと寝るのか？」

「お断りだそんなもん！」

「本気にとるなよ、きしよい」

相変わらず口喧嘩ではタスクに勝てないようで、カボチャの煮付けを頬張る時雨。時々彼の仕草が子どもじみて見えるのが、なんだか面白い。逆にタスクの方は年齢の割にひどく落ち着いている。

（私、あまり男の子と喋った事なかったからなあ……）

（クラスでも大人しい方だったし……。なんだか、新鮮かも……）

ふたりを交互に見てそんな事を思いながら、千登瀬がお茶を飲む。

「俺はテメエを信用してねえんだよ。和子の連れっていう証拠もねえしな」

「信用してないのなら、玄関先で追い返すべきでしょ。……いよいよ心配だな」

「うるせえよ！ つうか何で当然のようにメシ食ってんだ」

「アンタ、その肺活量どっから出てんの？ 牛みてえ」

ふたりの言い争いがヒートしてきたため、夕飯を終えた千登瀬はこっそりと台所から立ち去る。

（時雨さん……私が入院していた時、すごく不安そうだったから、

たまにはああやってストレス発散するのもいいかも……)

(タスクには悪いけれど……。私、まだ迷惑かけちゃってるし……)
(気を使うなど言われたけれど、やっぱり使っちゃう)

外の空気でも吸おう。

カラカラと玄関の戸を開けて、真っ暗な夜の中、身を躍らせる。

田舎の空気は都会と違って、やけに吸いやすい。その綺麗な空気が肺に溜まると思うと、何故か高揚感を感じた。

滅多に見れない星空を見上げ、安らかな気持ちに慕っていると、

……すけて。

また、あの声が聞こえてくる。

ビクリと体が震え、辺りを見渡した。誰もいない闇の中、確かに声は聞こえる。

千登瀬にしか聞こえない、声が。

……すけて、たすけて、助けて、助けてよ！

——貴方は私を護るためにここにいるのでしょう。

「なに……？ 誰……？」

こちらに訴えてくる声に尋ねても、何も答えてくれない。そればかりか、どんどん自分を求める声は大きくなっていく。

千登瀬の心を、砕くように。

——役たたず！ 私を助けないアンタは役たたずだ！

——消えろ、消えてしまえ！ 消えろ！

そしてそれは、千登瀬自身を愚弄する声に変わった。とても恐ろしい、女性の声。耐え切れない。

震え出した体は止まらず、やがて辺りの風がいつそう強くなる。木々が揺れ、さっきまでしていた虫の声も聞こえない。

「え、」

自分の目をうたがった。

そこに“いる”者を見て、背筋が凍りつき、鳥肌がたち、足が竦んで一步も動かなくなった。

化け物。

そう表現するしかないような、獰猛な化け物がいた。赤黒い肌。尖った牙。人間とはとても思えない、2メートルほどはあるゴツゴツとした体格。

今までそこにいたのだろうか。

唸り声を上げ、口からは涎が滴っている。

悲鳴も出せないまま、千登瀬が恐怖に引きつった顔でその場に座り込む。

（何アレ……っ、き、気持ち悪い……っ」

（戦わなきゃ……っ）

そして、自分の思考に愕然とする。

（え……どうして今、戦わなきゃって思ったの……？）

（私、戦おうとしていた……。なんで……）

化け物は千登瀬を視界に入れるとニヤリと口角を上げ、

「千登瀬！」

視界の端に、時雨の姿が映った。後ろにタスクも続いている。

「来ちゃ……ダメだよ……」

でも、何故だろう。

助けてという言葉が何故か出てこない。頭に浮かぶのは、自分自身
が化け物を倒さなければならぬという、強い使命感と、責任感
と、義務感。

意識が、完全にとびかける。

——忘れたの？ 貴方が何のために存在しているのかを。

（私は……）

——貴方は……

「止めろ、千登瀬！」

微かに脳内に流れ込んできたのは、時雨の声と。そして、ひとり
の真っ白い少女の微笑みだった。

目の前に立っているのは誰だろうと、時雨は愕然とする。

長い黒髪は風になびき、鋭い眼光が赤い。貫かれたはずの傷口は塞がっていて、足に付着しているはずの血は何故か消えていた。注視すべきは、千登瀬がいつの間にか持っている“日本刀”。透き通るような刃に、鞘が赤く光っている。

千登瀬のはずなのに、千登瀬ではない者がそこにいた。

（覚醒したのか……？こんなに早く……っ？）

（落ち着け、落ち着け。考えろ。今ここでやるべき事は、化け物を止める事じゃなくて……ッ）

（アイツの……千登瀬の暴走を阻止する事……ッ！）

時雨がタスクを見ると、彼も同じ事を考えていたようで、目が合う。

「千登瀬！聞こえてんのか、おいッ」

「無駄だって。アイツには聞こえてねえよ。今のアイツは千登瀬じゃねえんだから」

タスクの言った通り、千登瀬は明らかに普段の千登瀬とは違う。

柔らかな雰囲気も、優しい笑顔も、壊れやすそうな弱さも無い。

禍々しい殺気を放ち、今にも誰かを傷つけそうな目。

そして、手に握られている刀。

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオウツッ！」

咆哮をあげながら、化け物が千登瀬に向かってくる。
普通なら恐怖で足が竦むか、逃げ出そうとするだろう。悲鳴もあげる人もいるだろう。

しかし、千登瀬は逃げるどころか、手に持つ日本刀を構えた。両足を少し広げ、化け物の腹めがけて、

「だあああああああああああああああああッ」

貫通させた。

一刀両断。化け物の分厚い胴体がまっぴたつに分かれ、血飛沫が散る。返り血を浴びた千登瀬は、痙攣している化け物を、その息の根が止まってもなお、日本刀を振り下ろす手を止めない。

どこか、千登瀬の表情には歓喜が含まれていた。ニヤリと口角を上げ、それはそれは楽しそうに化け物の皮膚を引き裂き、肉を貫いていく。

「千登瀬、もういい！」

見るに耐え切れないと、時雨が後ろから千登瀬を抱きしめる。ようやく動きを止め、ゆっくりと千登瀬が振り返った。

その目は、殺気を漂わせている。

「ちょっと痛いけど我慢しろよ、とッ！」

ふたりの前に来たタスクが千登瀬の腹部を蹴り上げる。かはつという声と、唾液を口から吐いて、千登瀬が日本刀を放す。倒れそうになる千登瀬の体を抱きかかえ、時雨が尻餅をつく。

「ダッセ」

「……千登瀬は氣い失ってる。さっさと中に入れるぞ。また堕鬼が来たら今度こそヤバイ」

「覚醒させるのそんなに嫌なわけ？」

「千登瀬にはもう……あんな思いをさせたくねえ」

時雨の願いは、叶うことはないけれど。

「なに夢見てんだよ。今回の件できつとあちらさんに千登瀬の事が知れた。嫌でも千登瀬には刀を持ってもらうしかねえんだ」

「こいつは……戦場の道具か」

その言葉にタスクは少しだけ傷ついた顔をした。

時雨という男がやけに弱々しい生き物に見える。大人の男のはずなのに、小さな少女を抱きしめるその様子は、まるで母親のようだった。

大事そうに千登瀬の頭を撫でる時雨は、もう灰になっている化け物——堕鬼を見て、呟く。

「くそつたれ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1538z/>

鬼花伝

2011年12月10日12時52分発行